

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



加茂昭司さん
昭和7年8月30日生まれ。
南中音更在住

南中音更地域と 幼少の思い出

この地域は、昭和5年から6年にかけて当時十勝種馬所が開放したところで、見渡す限りうっそうたる原始林を伐採して開墾されました。私は昭和7年に鹿追村西上幌内で生まれ、翌8年に両親が南中音更地域に小作人として入地しました。

当時は家の土台もなく井戸もない状態で、部屋二間の家で湧き水を沸かして使っていました。冬になると近くの湧き水が切れるので、300坪先の沢から、勝手場の大きな水がめが一杯になるまで、1日に何度も水を運ぶのが私の日課でした。食事は麦やいなきびが中心でしたが、母手作

りの芋団子と手打ちそばはともおいしく、おふくろの味として今でも思い出します。

また、昭和7年には入植者家族の増加に伴い、地域望望であった南中音更特別教授場（南中音更小学校の前身）が開校しました。

戦後の農地改革で 自作農に

私は高等科を卒業して、14歳から農業の手伝いをしました。

昭和21年、戦後の農地改革によって小作人も1戸17町歩を限度に自分の土地を持ち、農業経営できるようになりました。その時の親の喜びは今でも思い出します。

昭和39年に地域の人と共同でトラクターを導入してようやく機械化が始まり、35歳の時に親から経営を譲り受け、同時に法人化しました。

地域の発展と 私たちの生活

昭和28年、瓜幕川を利用して初めて電気がつき、昭和43



南中音更開基50周年・南中音更小学校開校50年の記念碑

年には国営鹿追畑地総合開発によって、この地域一帯の川や道路、橋、土地の暗きよ排水などが整備されました。

また、農業機械による農業の大規模化も行われたほか、乗用車が普及して町への往来も便利になりました。

人と人のつながりが強い地域

南中音更地域は、昔からお互いに印鑑を押し合つて共同で機械を購入し、農作業をするなど、連帯感が強い地域です。住民同士や学校との信頼関係は厚く、困ったときにはいつも助け合ってきたと思っています。

しかし、入植当時と比べて農家戸数は3分の1ぐらいに

減少しました。一戸あたりの経営規模は拡大しましたが、隣近所とのかかわり合いが薄れます。時代の流れとはいえ、少し寂しい感じがしています。

私の願い

現在、農業経営は長男家族に任せ、私は棟続きで生活しています。80歳を過ぎて庭いじりや老人クラブの会合に顔を出しているのが日課です。

いくつかの公職を経験させてもらい、多くの声を聴いてきた中で、常に誠意ある態度で人に接し、自分自身誠実に生きていくのが私の人生の根底にありました。

個人、個性はもちろん大事ですが、決して自己中心的になることなく、誠意をもって人と協調しながら意思疎通を図る努力が必要だと思います。それがお互いの信頼関係を築き、地域一丸で行政と力を合わせ、交通、災害や過疎対策などさまざまな課題を解決していくことにつながると信じています。